

NO. 50
March '11

Newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

体育現場でのエピソード……

谷 祝 子

1985年4月に女性学インスティテュートが開設され、研究所員に参加を呼びかけられました。

本学の校章である三つ葉のクローバーの一葉「身体」の部分を担当して、学生の身体、健康を守る立場にいる私たちも関わっているのではないかと名乗りをあげ一員に加えていただきました。

女性学の授業が開講された頃、体育の授業終了後に使用した時計を片付けるよう学生に頼んだら、コードを巻かないでそのまま引っ張って倉庫に入れようとしたので、「きちんとコードを巻いてよ、女の子でしょ」と言えば、その学生が間髪入れず「先生、女の子って言ったらいかんのですよ。女性学で習いました」と言いました。後で担当の先生におたずねしたら「変なところだけ覚えているんですね」「このような時、どう言えばよいのですか?」「あなた大学生でしょと言えばいいのですよ」と教えていただきました。

その後、そんな私がなぜか女性学の授業を他の3人の先生方と担当することになりました。女性学からお借りして読んだ図書のかなに「体育、スポーツの世界はジェンダー研究や実践の面でスタートが遅れている」と書かれていて、それまで意識しなかった、意識もなかった言葉や性別への思い込みなどがたくさんあり混乱したことが多々ありました。女性学とはどのような学問なのか勉強不足ながら、体育におけるジェンダー・フリーの実現は困難にも思われるが「身体」の関与は非常に大きく、体育領域が果たせる役割について少なからず気づきました。

体育カリキュラムにおいて、平成元年の学習指導要領改定により「女子はダンス、男子は武道」という性別制限を設けず、以後、男女「共修」が実施されてきていると思えます。夏に神戸で行なわれる「ダンスの甲子園」といわれている「全国高校・大学ダンスフェスティバル」を久々に見ました。男子生徒・学生が踊っている作品が多くなっているのに驚きました。私がああ頃の時代では考えられないことでした……。体育祭に踊るフォークダンスが唯一のダンスでした。恥ずかしそうに、ぶきっちょに踊っていた同級生の姿を思い出します。

田舎の野山を走りまわり遊んでいた私は「体育が得意、体を動かすのが大好きな女の子」でした。

長年、女子大生の授業を担当してきて、能力を高い

レベルまで上げるというよりは、体育に対する「苦手意識」や「体育嫌い」をもって入学してくる多くの学生たちに、体育を好きになってほしいと考え、仲間づくりをしながら「楽しい授業」「運動する大切さ」を説いてきました。

学生からは「体育がこんなに楽しいとは思わなかった」「体育を好きになった」との声が多く聞かれます。欲を言えば、もっと体力とコミュニケーション力をつけて社会に出てほしいものです。

“からだ”は動かさないと錆びてしまいます。何事も食わず嫌いせずに“やってみる”やってみて自分のからだで心で感じてほしいのです。

「女子教育は女子の手で」と、先人の思いとともに神戸女学院大学の体育は受け継がれてきました。

微力ながらも43年肩にかけてきた“タスキ”を次の先生へバトンタッチできる喜びを噛みしめている次第です。

(体育研究室教授：体育学)

学外講演会で講演を行なって

【第1回：2010年10月13日】……Shawn BANASICK
●「US Military bases in Okinawa and the Legal Issues surrounding the Futenma Relocation」

The construction of a replacement facility for the US military's Futenma base in Okinawa became a major political controversy once again in 2010. There are many perspectives from which one could analyze the Futenma controversy, but for my lecture I decided to talk about the efforts of Okinawan activists to prevent the construction of a Futenma replacement facility in the Henoko area. In 2003 the activists filed a lawsuit in the US District Court for the Northern District of California which centered on forcing the US military to take into consideration the environmental impact that the construction of a replacement facility would have on the habitat of the Okinawan dugong. The case is still ongoing, but the activists have received several favorable rulings.

During my research I discovered that activist groups in Vieques, Puerto Rico had filed a similar lawsuit years earlier. Puerto Rico, much like Okinawa, was home to several US military bases and training facilities. In Vieques there was also a long history of residents who

opposed the presence of the US military training facility on the island. Although the lawsuit the residents filed to remove the US military from Vieques ultimately failed, political pressure eventually forced the US military to leave the island. I became curious as to why the anti-base groups in Vieques were successful while Okinawan groups have had difficulties influencing the actions of the US military.

In the lecture I attributed the success of the anti-base movement in Vieques to the way in which they framed their protests. Specifically, they were able to shift perceptions of the issue from 'local environmental problem' to 'national political problem related to racial discrimination against Latinos'. In contrast, I feel that Okinawans have had little success in shifting the perceptions of their problems with the US military from the local level to the national. I think that many people in the audience were unaware of the parallels between Okinawa and Vieques, and I enjoyed the discussion that followed the lecture.

(文学部准教授：国際関係論)

【第2回：2010年11月10日】……………出口真紀子

●「アメリカに長く住むと日本人はどう変わるのか：

文化変容のプロセスを踏まえた自己変革の考察」

私は「アメリカに長く住むと日本人はどう変わるのか：文化変容のプロセスを踏まえた自己変革の考察」というタイトルの公演を行いました。

アメリカに長期滞在した日本人のインタビュー調査をもとに、アメリカに長く住むと文化的自己観（相互独立型自己観・相互協調型自己観）に変化が見られ、徐々に自己肯定感が高まり、ポジティブに自分を捉えるなどの変化があることや、言語習得と同様、文化習得にも適齢期があること、また、文化習得には、認知・行動・情緒の側面があり、情緒面が習得することに最も時間を要する、などのお話をさせていただきました。

参加者の中から「日本人に見られる相互協調型自己観がいじめの問題に結びつくのでは」という質問がありました。確かに相互協調型自己観は近い他者に視線が向けられているため、良く言えば「思いやり」、「集団の絆」につながる半面、他者の些細な差異に注目することから「阻害」、「いじめ」に発展することがあります。では、独立型自己観が見られるアメリカではいじめはないのかということではありません。ただ、いじめの性質に大きな違いが見られます。独立型自己観は、他者をあまり意識・擬視しないため、良く言えば「差異に対して寛容」、悪く言えば「他者に対する

<P.3に続く>

魚の性の不思議

横田 弘文

魚の中には性転換するものが多いのですが、やみくもに性転換している訳ではありません。皆が自分の都合のいい性へ変わったら、最終的にはオスばかり、あるいはその逆の群れになってしまいます。そのため、魚たちはあるルールに則って性転換しており、それを「体長有利性説」と呼んでいます。端的に言うと大きい個体ほど強い繁殖能力があるため、その群の中で優位に立つということです。例えば、オスが多数のメスを独占する配偶システム（いわゆるハレム）を持つ魚種では、大きなオスのみが高い繁殖成功を得ます。そこで、小さいうちは多数のメスの中の1尾として繁殖し、メスを独占できるサイズまで大きくなったらオスに性転換し多数のメスと交尾する方が、子孫を効率良く残すという点で有利になります。この代表例として現在注目されているのがオキナワベニハゼです。

オキナワベニハゼは体長約3.5cmで、鹿児島県以南、インド・西太平洋に広く分布し、洞窟などに生息しています。群内で体の最も大きな個体がオスとなり、メスを束ねてハレム社会を形成します。そのため、実験室内でメス2尾を同じ水槽に入れると、わずか30分以内に体の大きい方がオスとして振る舞い出します（ちなみに、オス2尾同士ではこの逆が起こります）。これには視覚が関与しており、体格差が0.2mm以内でも正確に見分けて、大きい方が性行動をオス化させます。そして、その後約1週間をかけて生殖腺を卵巣から精巣へと変化させ、完全に成熟したオスになります。つまり、視覚から得られた体格差に関する情報が、まずオキナワベニハゼの脳内でオスメスの役割分担を決定づけ、瞬時にオスの行動を促します。それと同時に脳からホルモンが分泌され、オスメスの機能的な特徴である精巣・卵巣は遅れて形成される、ということが明らかになっています。生物が有する本来の遺伝情報によらず、群内の社会構造の変化に応じてオスメスの役割分担を決定している事例といえます。こうした魚類の脳での性的可塑性に関する研究は魚類のみならず、ヒトでみられる性同一性障害のような疾患解明にも貢献できるのではないかと期待されています。

(人間科学部准教授：生態毒性学)

男女単学システムと言語教育

松尾 歩

私はKCの卒業生ですが、女学院を志望し受験した理由としては専攻分野のことがわかりが頭にあり、大学の他の特色、例えば、伝統的に女子を中心とした教育をしていることや、リベラルアーツの大学であるということについては、あまり注意を払いませんでした。しかし、大学を卒業しアメリカのマンモス大学に留学した時に、初めて女学院と他の大学を比較し、女学院の特色について考える様になりました。とりわけ、去年まで教鞭をとっていたイギリスでは、歴史の影響からか、男子校、女子校などの単独教育に興味を持つ人が多く、ラジオ番組などでもsingle-sex educationの話題が取り入れられる事が多かったので、私も、自分の受けてきた女子を中心とした教育について考える機会が多くなりました。ご存知の方も多いと思いますが、イギリスの名門大学、ケンブリッジ大学は男子のみを受け入れるカレッジとして創設され、1873年まで女子は受け入れられませんでした。初めて女子を受け入れたカレッジはGirton Collegeで、その後、1970年までに元来男子カレッジとして創設されたカレッジの殆どが共学となり、1988年には最後まで残っていた男子単学のカレッジが共学になりました。現在ではSingle sexのカレッジといえば、女子のみのカレッジだけが存在しますが、男子単学のカレッジは存在しません。といえども、オックスブリッジに進学する学生達は有名な私立高校を卒業しており、その中には男子校のEatonやHarrow、また女子校のCheltenhamが含まれます。このような単学のメリットは男女の成長と勉強やその他の生活の取り組み方のベースの違いを区別して教えられる事。それぞれの学校では男子あるいは女子生徒を専門とした教育者が教鞭に立ち、各自に適したオーダーメイドの教育が可能である、と唄われています。最近言語学の分野でも男女の言葉の習得の違いについて注目されています。特に脳科学との関わりで、男女が第一、あるいは第二言語を習得する時にそれぞれ違う脳の部分を使うことが立証されています。例えば、Ullman (2008) 等の研究によると、男性は言語の中でも、過去形の規則変化など規則的 (procedural) な知識に長けているが、女性はdeclarativeと呼ばれる、以前に聞いた事のある不規則変化などをそのまま記憶することに長けているので、過去形の作り方一つをとっても女性と男性が秀でる面が違って来るそうです。こう考えると、女性の言語習得における得意、不得意とする分野に集中して教育のできるKCは女子学生にとって、良い教育環境であることは間違いありません。この事を念頭において講義を計画していきたいと思えます。

(文学部准教授：英語学)

関心が薄い」、とも言えます。また、いじめの性質も日本のような加害者の顔が見えず陰湿な側面の形と違い、「お前が嫌いだ」とダイレクトに表現してくるところがあります。結局、文化的自己観というのは、良い面・悪い面が共存しており、どちらもその国にとってよりベターな適応法として発展してきたわけです。これから益々海外との接点を持つ日本人が増える中、こうした文化心理学的視点はより重要になってくると思われるます。

(文学部准教授：文化心理学)

2010年度後期活動報告

I 講演会・セミナー等

〔前期開講分・25周年記念特別講演会については前号を参照のこと〕

学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

<第1回> 2010年10月13日 (水)

「沖縄駐留米軍基地、並びに普天間基地移設をめぐる法律上の論点」

“US Military bases in Okinawa and the Legal Issues surrounding the Futenma Relocation”
(同時通訳付)

講師：Shawn Banasick氏

(文学部准教授：国際関係論)

参加者：44名

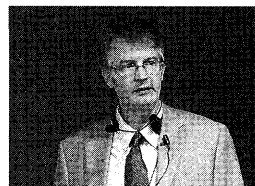
<第2回> 2010年11月10日 (水)

「アメリカに長く住むと日本人はどう変わるのか—文化変容のプロセスを踏まえた自己変革の考察—」

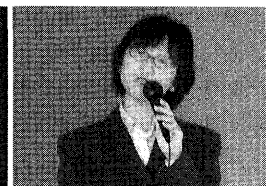
講師：出口真紀子氏

(文学部准教授：文化心理学)

参加者：25名



Shawn Banasick氏



出口真紀子氏

II 研究助成

「米国内における人身取引対策」

米田真澄 (文学部准教授)

「ジェンダー学コース及びフィールドワークに関するカリキュラム：インド及びフィリピンの大学と女性NGOの比較研究」

津田ヨランダ (文学部准教授)

- Ⅲ 学会等出張補助 (国内・海外)
2010年度は申請無し。
- Ⅳ 授業「女性学」
例年通り、2010年度前後期ともに、主題コースとして、Cu134(1)(2)「女性学 (実践編)」
Cu234(1)(2)「女性学 (理論編)」を開講した。
- Ⅴ 学生懸賞論文 (「女性学インスティテュート賞」)
2010年度 (第12回) は9編の応募があり、選考結果は以下の通り。
 <最優秀賞> (1編) : 賞金5万円 (賞状)
新藤祐子氏
(神戸女学院大学文学部2010年3月卒)
 <優秀賞> (2編) : 賞金2万円 (賞状)
岸本小百合氏
(神戸女学院大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程・人間科学部2010年3月卒)
小西くみこ氏・若林弘恵氏 (共同研究)
(共に神戸女学院大学人間科学部2010年3月卒)
2010年10月15日、神戸女学院講堂でとりおこなわれた大学の記念賞授与式にあわせて、表彰を行なった。最優秀賞および優秀賞の受賞者全員が列席した。
- Ⅵ 出版物
『女性学評論』第25号 (2011年3月発行)
「ニューズレター」No.49 (2010年11月発行)
「ニューズレター」No.50 (2011年3月発行)

—2011年度(第13回)学生懸賞論文募集中—

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象は本学学生 (学部生・大学院生) 及び2010年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文(1編)には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文(2編)には賞金各2万円及び賞状が授与される。

2012年3月発行予定の『女性学評論』第26号に最優秀論文の全文・優秀論文の要旨を掲載する。締切は2011年7月8日(金)必着。選考結果の発表及び表彰は2011年10月中旬の予定。詳細は当インスティテュートまで。

—2011年度前期講演会等のご案内—

■特別講演会

日程：2011年5月27日(金) 10:35~11:25

会場：神戸女学院講堂

講師：谷 祝子氏 (本学名誉教授)

演題：「神戸女学院生気質の変遷」

<申し込み：不要、受講料無料>

■連続セミナー「途上国に学ぶ神戸女学院生」

日程：6月2回、11月2回、計4回予定

いずれも、金曜 14:00~15:30

会場：神戸女学院大学 JD-104教室

定員：50名 (要申込、受講料無料)

*全4回のうち、3回以上の出席者には「修了証」を発行
(第1回) 2011年6月10日(金)

「エチオピアで学ぶ」(仮)

講師：金田知子氏 (文学部准教授)

報告者：石井亜紀子氏、南佳枝氏

(ともに2008年度卒業生)

(第2回) 2011年6月17日(金)

「学内NGOのスタディプログラムで学ぶ」(仮)

講師：金田知子氏 (文学部准教授)

北川将之氏 (文学部専任講師)

報告者：Habitat for Humanityの学生

(第3回) 2011年11月 (日程未定。金曜、14:00~)

「インド体験学習で学ぶ」(仮)

講師：北川将之氏 (文学部専任講師)

報告者：北川ゼミの学生

(第4回) 2011年11月 (日程未定。金曜、14:00~)

「韓国体験学習で学ぶ」(仮)

講師：石川康宏氏 (文学部教授)

報告者：石川ゼミの学生

女性学インスティテュート インターディシプリナリー・プログラム

「女性学インスティテュート インターディシプリナリー・プログラム」は、本学学生の「女性学、ジェンダー・スタディーズ」への認識を高めることを目的としています。「女性学(実践編)」「女性学(理論編)」両科目を含む、女性学やジェンダーの視点を取り入れた認定科目を在学期間中に10単位以上を修得・申請した学生に、「プログラム」修了証を交付する制度です。女性学インスティテュートに交付申請要綱を用意しております。

修了証交付を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類(成績表等)を女性学インスティテュートに提出してください。学期末(毎年10月と3月を予定)に、修了証が授与されます。認定科目は、掲示、Universal Passportなどで告知します(開講年度にかかわらず、全対象科目を掲示します)。

2010年度女性学インスティテュート編集委員

飯田祐子、井上紀子、津上智実、米田眞澄(委員長)
編集事務：東かおり、吉永真理子 (ABC順)

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート
〒662-8505 西宮市岡田山4-1
TEL: (0798) 51-8545 FAX: (0798) 51-8527
URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>